

第5回青森県生涯学習審議会 概要

1 日 時 平成28年6月30日(木) 14:00~16:00

2 場 所 青森警察本部 6階 教育委員会室

3 出席者 <委員>

太田博之、荒川由美子、浮木隆、上野修子、澁谷尚子、駒井昭雄、春藤千秋、
西澤ナミ子、原英輔、三上亨 (敬称略)

<青森県教育委員会>

生涯学習課長 児玉政光
企画振興グループマネージャー 森田勝博
学校教育課課長代理 仁和由紀人
(他事務局2名、総合社会教育センター1名)

4 案 件 (1) 報告書案について
(2) 今後のスケジュールについて
(3) その他

5 配付資料 ・次第、青森県生涯学習審議会委員名簿、座席図
・資料1 報告書案
・資料2 第12期青森県生涯学習審議会の今後のスケジュール
・参考資料1 県外先進事例視察報告
・参考資料2 報告書の骨子

6 審議概要 (◇会長、副会長 ◆委員 ○事務局)

(1) 報告書案について

○ 本日の会議は次第のとおり、案件1として報告書案について審議する。章ごとに区切って順番に見ていくこととしたい。

第1章 「本県の地域をめぐる現状」について

- ◆ 「青森から出たいと考える子ども」について、最近5年間は県内就職者数が増えている。流出はしているけれども、地元に残りたくないと考えている子どもたちが徐々に減ってきているのではないか。
- ◇ この部分の表現については、事務局一任とする。若者の雇用環境や所得状況等に関して、提言書の中でも触れておくべきではないか。生業づくりのことや、地域で覚悟をもって生きていくという想いみたいなものも書き加えなければならないのではないか。
- ◇ 事例1として大鱈元気隊の取組を紹介しているが、書かれている内容は問題がないと思う。ただし、もう少し背景や事実を説明しておくことより伝わりやすいのではないか。

第2章 「ふるさとあおもりの魅力を次代に伝える学びの在り方」について

- ◆ 6ページの囲みの表現を「地域の魅力を発見し、発信する楽しさを知ってもらう」とする方がよいのではないか。
(委員全員賛同)

- ◆ 「他者の目から見えても、…住民の目から見えない」という表現があるが、何が言いたいのかが伝わりにくい。
- ◇ 五城目の視察でも、どこにでもありそうな田園風景なのだが、それに魅力を感じて、移住してくる人がある。でも、地元の人には、それに気付いていないというような意味だと思う。この部分の表現については、事務局で検討していただきたい。
- ◆ (2) の囲みには「若者を巻き込みながら…」と書いていて、次に、「県外からの転入者は…」となっているので、ギャップを感じる。全体的に(1)と(2)の流れが悪いように感じる。
- ◇ 「大人の主体的な学び」という中に、移住希望者に対する働きかけのことに触れた方がいいのではないかと。魅力がある状態をつくるために、どういうプロセスがあるのかということを見ると、その中の一つには、潜在的な移住希望者にどうアプローチするかということが大切になってくるということ念頭に置いて文章を書いていった方が、分かりやすい文章表現になるのではないかと。
- ◆ 次世代につなぐというテーマに合致しているのだからいいと思うのだが、次に書かれていることがイベントに傾きすぎているから、違和感があるのだと思う。(2)も若者を巻き込むとあって、移住者がイベントに参加するという内容になっていて、違和感があるのだと思う。
- ◆ (1)の方は、囲みをしている文章の次に社会参加活動に関する調査の結果があって、社会参加活動のことに触れられているので、若干イベントに傾いている感はあるが、まだ理解できる。しかし、(2)の方では、移住してきた方がイベントに意欲的に参加するという文章で始まらない方がいいのではないかと。最初より、最後の段落でもいいのではないかと。
- (1)や(2)の見出しに書かれている文節の順で、段落を構成していった方がいいと思うのだが、(2)の場合、最初の段落で「ふるさとの良さ」に触れ、次に、「若者を巻き込む方法」について触れ、最後に、「若者ととも大人が学ぶ」という文脈の流れにしていけばいいのではないかと。順番を変えて整理したい。
- ◇ 地域にはいろいろなイベントがあったり、祭りが行なわれたりしているが、それらを運営している方々は固定され、高齢化している。だからこそ、若い人たちに運営にも携わってもらって、改めて地域の良さに気づいてもらうという流れにするといいのではないかと。また、青森には組み立てていくと経済的な価値だけでなく、社会的な価値もプラスしていくと、十分に魅力のある地域がたくさんあるということを伝えていく必要があるのではないかと。
- ◇ 次に、3の「地域の未来の担い手育成のために」に移ります。
私は、ここで未来の担い手として必要な力は、起業する力の「起業力」だと思った。ここで、所得を得ていくということに触れていかないといけないのではないかと。
- ◆ 地域で若い人たちを上手に育てている例として、鶴田町の「みどりの会」のシステムがとても素晴らしいと思っている。それは、毎年会長が代わっていき、若い世代が多いのだ。会長職を若い世代の人がやると、周りの大人たちから認められ、会長としての力量も問われ、一人一人が成長していく。10年も経過すると、町を引っ張っていく人が10人育つことになる。そして、どんどん若い人たちがつながっていくのが、素晴らしいシステムだと感じている。
- ◇ コミュニティのつながりを強化するという面で、尊敬する大人がいるというのはとても重要なことだと思う。鶴田町の例は説得力がある。一方で、自分たちで起業して成功している人も紹介されていた方がいいなと感じる。どこかに移住したいけれど、どこに移住すればいいのかわからない若者に情報が届くということも大事だし、情報を発信できる魅力のある地域にする必要がある。求められている情報を見極めることが大事だ。

- ◆ 移住者に仕事を準備しておくというのは難しいと思う。移住者をどこに住ませるかということよりも、その人にどのような仕事をさせるかが必要だ。また、仕事を準備してあげるよりも、何がやれるかを教えてあげられる人が必要だ。
- ◇ 仕事には稼げる仕事とそうでない仕事があって、それをバランスよく提供できるようになることが、魅力ある地域と呼べるのではないか。そうすると、生業づくりということにも結びついていくと考える。ということを理解した上で、文章をつなげていくといいのではないかと考える。
- ◆ 移住してきた有能な人たちは、自分の力でどうにかできるのでいいのだが、むしろ、そのような人たちを引っ張ってくる行政マンがとても重要だと感じる。その地域を魅力ある地域に思わせる行政マンが必要だ。視察先の五城目町が上手くいったのは、地域の事情を熟知していて、誰に話をすれば解決できるかをコーディネートしたからこそ、うまくいったのだと考える。移住者を増やすためには、希望する人たちが定住できるように、関係する法律についてアドバイスし、文書作成をサポートし、必要であれば助成金を出せるような行政の支援と人が重要である。
- ◇ これまでの意見を踏まえながら、第3章の「ふるさとあおもりの魅力を生かした地域のつながりづくりに向けて」に入っていきたい。
- ◆ 8ページの中段にSNSという言葉が使われているが、インターネットを使うことはこれからの時代に必要なことだと思うので、もう少し丁寧に説明を加えてもいいのではないかと考える。

第3章 「ふるさとあおもりの魅力を生かした地域のつながりづくりに向けて」について

- ◇ 12ページの中段に「人口減少克服に向けて、地域の中の世代を超えたつながりが“安定したつながり”になるように努力する」とあるのだが、“安定”のためには、若い人たちと協働していくことが必要だ。ふるさとにも生きていくために切り拓いていけば、新しいビジネスだったり、生き方だったりがあるのだということをきちんと伝えなければならない。可能性だけではなく、可能性を実現する能力を地域住民が協力して学んでいくと、生計として成り立っていけることを伝えたい。やはり、取り組む努力をすることで、価値観が変わってくる。社会的な見方が変わってくると、子どもたちの仕事に対する見方も変わってくるのではないかと考える。また、どこかに地域を発展させていく“覚悟”についても触れるべきではないかと思う。現実には厳しいのだけれども、こういうことをやっておけば、地域で生き残っていくチャンスにつながる地域の魅力が必ずあるのだということを伝えていきたい。
- ◆ 第3章の柱として「地域のつながりづくり」となっているが、では、つながりづくりをするためには、何がポイントになるのかということをここで、しっかりと示す必要があるのではないかと考える。情報を発信することも大事なのだが、地域にきた人たちをつなげる役目、つまり、キーパーソンがポイントになるのではないかと考える。報告書では「そのような人財を探し出すことが求められます。」という終わり方になっているので、表現が弱いと感じる。
- ◇ 全体的に同じような表現になっていて、強調するところは、強調していかないといけない。実績に裏付けられた委員の発言なので、読む人の心に響いていくのは間違いない。しかし、報告書では、つなぎ合わせすぎてしまっている感が多少ある。
- ◆ 行政と協働という言葉がいいのかどうかは分からないのだが、キーパーソンを含め、そのキーパーソンは民間でもいいので、行政が必ずサポートに入らなければ地域コミュニティの再生に結びついていかないということを経験して報告書に書き加えていただきたい。
- ◇ 先ほど、キーパーソンという話題になっていたが、最後の段落に「U・Iターンを考えている人が行動を起こした際の受け皿、…一歩を踏み出すきっかけとなるでしょう」という文章があって、地域とのつなぎ役、地域に馴染むためにコーディネーターが必要だということがよく言われている。しかし、行政と民間が協働して地域でいろいろなことができる状態をつく

っていないとコーディネートすることができないという面もある。それをだれがどこでやるのかというようなことが報告書に記載されているといいのではないか。

- ◆ “ゆるやかなつながり”という言葉のイメージがとてもいい。がちりとなつがっているわけではなく、でも、しっかりとつながっているなど、イメージが膨らむ言葉になっているので、このまま使っていきたい。強いつながりでなく、ゆるやかなつながりというのが、包容力を感じさせる。優しい感じを想起させるいい言葉だ。
- ◇ わたしもこの段落の最後は、この文章でよいと思うのだが、報告書の最後の終わり方としては弱い気がする。Uターン・Iターンにしても、自分の今後のあり方や未来のことを考えながら、決断をしなければならぬわけで、受け皿となる地域の人たちにも同じような覚悟が必要となると思う。だから、前段にそのような部分を書き加えて、ゆるやかなつながりにつなげていくのであればいいと思う。
- ◆ 最後に総括をつけるということであれば、若者の流出の現状のところに、残りたくないということを入れるのではなく、仕事がないとまでは言わないが、職種が少ないといったことが、若者の流出に影響しているかもしれないということを書き加えておいて、今後は仕事を創り出すことが必要なのだということにつなげていってはどうか。
- ◇ Uターン・Iターンのところに出てくる“ゆるやかなつながり”は地域のつながりのことも意味するのだが、ここに書かれていると、意味が狭くなってしまう。タイトルのまとめとして、いい言葉なので、書き方を工夫したい。
- ◆ 稼ぎがあることは別として、充実して仕事をしているモデルになる人がいて、その人と会うことがとても大事だと思う。いくらいい地域でも、こんな人になりたいとか、こんな生活をしてみたいとか、子どもたちがこういう暮らしをすればいいのだということを感じ取ってもらえることが重要だと思う。そして、充実して生活しているモデルを示していくとか、見せていくことが必要だと感じる。そういう努力を行政にしてもらいたい。
- ◇ もうひとつまとめのための項目を増やした方がいいのかもしれない。生業づくりであったり、コミュニティビジネスであったり、ビジネスモデルとしての成功例だったり、地域経営という言葉が当てはまるのか分からないが、この部分は、行政でも、小さなグループでも、個人でも、いろいろなつながりを持てるわけだから、我々は経営していくのだという、そこに生きていくための生業が生涯学習を通じて創り上げられるのだということを伝えていきたい。
- ◆ 五城目の丑田氏も多くの事業を展開しているが、儲けるための事業とそうでない事業とを行っている。儲けがなくとも必要だと思えばそれは仕事になる。稼ぐか稼がないかは二の次で、稼ぐことがいけないのではなく、これは稼ぐ仕事、これは稼ぎにならない仕事、でも、自分がやらなければならないと思うことが仕事であると思う。それは、やりたいことではない。それを、周りのみんなが分かるようになってくると、これはボランティアでこれは有償ボランティアで、とかでスタートしなくなると思う。そこら辺をわかってもらうための生涯学習なのだと思う。
- ◇ うまくまとめていただいた。今日は、いろいろな角度から発言いただき、提言を含めた報告書案についての審議を閉じたいと思う。報告書には、今日の各委員の発言を盛り込むようにしていただきたい。巻末資料として、秋田の先進事例視察のことがまとめられているが、その他の資料を含め、目を通して、何か気づいたところがあったら、事務局へ連絡してほしい。

(2) 今後のスケジュールについて

- 事務局より資料2「第12期生涯学習審議会の今後のスケジュールについて」を説明

(3) その他